



将来、私たちのような活動をする人が 必要でなくなる社会が私の夢なんです。

プロフィール

1962年、インド中央部にある都市ナグプール生まれ。1971年、9歳で僧侶になるため来日。坂本小学校、比叡山中学・高校で学びつつ延暦寺にて修行を重ね、百日回峰行も成し遂げる。1995年にインドに帰国、パンニャ・メッタ協会を設立し、孤児院や図書館を建設・運営するなど、教育・社会福祉活動に力を注いでいる。パンニャ・メッタ協会日本委員会についてのお問い合わせは、TEL 077-578-0110 Eメール sangha@pmj3.com URL http://pmj3.com

ところが、この話があっという間に広まってしまって、何の準備もできていないのに100人くらいの人が「預かってほしい」と言っていて子どもを連れてきたんです。そんなに来られても、子どもにとっては一生の問題ですから「はいどうぞ」とはいかないので、ほとんどの人は帰ってもらったんですが、その中で、7人の子どもを預かることにしました。それは、私たちが自分の方の都合を考えていたら、その子どもたちは明日からストリートチルドレンにならざるを得ない状況だったからです。すぐに受け入れられないことには、彼らの人生はどうなるかわからない。そこで、その子どもたちを預かりました。これが「パンニャ・メッタ子どもの家」孤児院の始まりなんです。今は34人の子どもたちが一緒に生活しています。

来日のきっかけは？

師事している比叡山延暦寺の住職さんのご縁で比叡山延暦寺の公式留学生として9歳の時に来日しました。皆さんは、インドは仏教発祥の地ですので、今でも仏教国だという感覚をお持ちですが、これはまったく間違ったイメージで、実際には0.7%ぐらいしか仏教徒はいません。ほとんどはヒンズー教徒です。インドにはカースト制度という身分制度が現存しますが、このカースト制度撤廃運動の一つとして、インド初代の法務大臣であったアンベドカル博士が1956年に仏教改宗運動を始めました。私の父親もその時の門弟だったので。ですから私は「インドにもう一度仏教を」という親の願いで日本に来ました。

故郷を離れて 寂しくはなかったですか？

9歳までは確かにインドにいましたが、それから約15年間ずっと日本にいて、インドには3、4回、日本の学生が外国旅行をするような感じで行ったので、寂しいという気持ちはないんですよ。むしろ、24歳でインドへ帰った時のショックの方が大きかったです。

それは、どんな ショックだったのですか？

「あいうえお」も知らない状態で日本に来ましたけど、坂本小学校の3年生に編入して、半年もすると日常会話にはまったく支障がなくなりました。すると今度は、インドの人と話す機会がほとんどないので、5年目に初めてインドに帰ったときには、完璧にインドの言葉を忘れてしまっていたんです。ですから親とまず話ができない。その頃は師匠がヒンズー語を話していたので、師匠を通訳にして親とコミュニケーションを取りましたが、そんな感じなので、親の方も自分の息子だと言ってもやっぱり一歩引いてしまったみたいですね。

最初によくご両親が 送り出されましたね。

そうですね。私は一人っ子なんです。日本でもそうですけど、一人っ子を手放すというのは、大変なことですよ。自分たち個人の愛情等を投げうって、社会のため、国のために送り出したんですからね。そのために、一人っ子を手放す道を選んだというのは、ものすごいことだと思います。

その後インドに帰国されて、 子どもの家の活動を 始められたんですね。

日本で学んだことをもとに仏教を広めることが大きな目的だったので、ボランティア活動をするつもりは全然なかったんですよ。それで、生まれ故郷のナグプールから東南の方へ90キロほど行った村に8000坪くらいの土地を買って、お寺を造りました。ほとんどの人が大地主の所に行って日雇い労働をしながら1日何十ルピーかをもらって生活しているような村です。寺は1987年にできあがったんですが、問題は私がヒンズー語を話せないこと。コミュニケーション一つ取れない人間が、仏教を上段に構えても、誰も聞く耳もたないというのは当たり前ですよ。これはまず、自分が言葉や、その現状を実際に体感した上で活動しなければだめだと思いました。初めの3年間は、そのことに専念したんです。

そこからどのように、 今の活動がスタートしたのですか。

まず子どもたちと関わりを持っていこうと日曜学校を始めたのですが、これもあまり実を結びませんでした。衛生のこと、道徳のことなどを教えるのですが、家に帰るともう忘れてしまって、身につかないんですね。そこで、1人でも2人でも24時間、私たちと一緒に生活をするような子どもがいれば、もっと有意義なことができるんじゃないかと考えました。



西インド、グジャラート州のカッチ大地震の被災地で

これからの目標、将来の夢は？

「子どもの家」にいる一人でも多くの子どもの、精神的にも経済的にも自立して、まっとうな人生を歩めるようになってほしい。そして最終的には、将来、私たちのような活動をする人が必要でなくなる社会が私の夢なんです。老人や身障者に対するケア等を除けば、今我々がやっている社会福祉的な活動は、社会や個人がしっかりしていたら必要でないものばかりなんです。インドの特殊な状況があるから、このような活動が必要になっているんですよ。個人が自立し、国や社会がきちんと機能して、もはやこのようなボランティア活動が必要ないインドになってほしいと願い、その為に必要な人材育成をしたいと考えています。

滋賀県の人へのメッセージを お願いします。

滋賀県はいい所ですよ。インドの仕事を終えて、ずっとここにいたいと思っているくらいです。でも滋賀県の人が滋賀県の素晴らしさを忘れてしまっている気がします。もう一度、自分たちの文化や伝統を見直してほしいと思いますね。